

身投げ救助業

菊池 寛

物の本によると京都にも昔から、自殺者は可なり多かつた。

都は何時の時代でも田舎よりも生存競争が烈しい。生活に堪へ切れぬ不幸が襲つて来ると、思切つて死ぬ者が多かつた。洛中洛外に烈しい饑饉などがあつて、親兄弟に離れ、可愛い妻子を失うた者は世をはかなんで自殺をした。除目ちもくに洩れた腹立まぎれや、義理に迫つての死や、恋の叶はぬ絶望からの死、数へて見れば際限がない。まして徳川時代には相対死あひたいじなど云うて、一時に二人宛死ぬ事さへあつた。

自殺をするに最も簡便な方法は先づ身を投げることであるらしい。之は統計学者の自殺者表などを見ないでも、少し自殺と云ふことを真面目に考へた者には気の付く事である。所が京都にはよい身投げ場所がなかつた。無論鴨川では死ねない、深い所でも三尺位ぐらゐしかない。だからおしゆん伝兵衛は鳥辺山で死んで居る。大抵は縊れて死ぬ。汽車に轢かれるなど、云ふ事も無論なかつた。

然しどうしても身を投げたい者は、清水の舞台から身を投げた。『清水の舞台から飛んだ気で』と云ふ文句があるのだから、この事実には誤りはない。然し下の谷間の岩に当つて碎けて居る死体を見たりまたその噂を聞くと、模倣好きな人間も二の足を踏む。何うしても水死をしたいものは、お半長右衛門の様に桂川迄辿つて行くか、逢坂山を越え琵琶湖へ出るか、嵯峨の広沢の池へ行くより外に仕方がなかつた。然し死ぬ前のしばらくを、十分に享樂しようと云ふ心中者などには、この長い道

程もあまり苦にはならなかつた。ところが、一時も早く世の中を逃れたい人達には二里も三里も、歩く余裕はなかつた。それで大抵は首を縊つた。聖護院の森だとか、糺たすの森などには椎の実を拾ふ子供が、宙にぶらさがつて居る屍体を見て、驚くことが多かつた。

それでも京の人間は沢山自殺をして来た。凡ての自由を奪はれたものにも、自殺の自由だけは残されて居る。牢屋に居る人間でも自殺は出来る。両手両足を縛られて居ても極度の克己を以て息をしないことによつて、自殺だけは出来る。

ともかく、京都によき身投げ場所のなかつた事は事実である。然し京都の人々はこの不便を忍んで自殺をして来たのである。適当な身投げ場所のないために、自殺者の比例が江戸や大阪などに比べて小であつたとは思はれない。

明治になつて、榎村京都府知事が疏水工事を起して、琵琶湖の水を京に引いて来た。此の工事は

京都の市民によき水運を具へ、よき水道を具へると共に、またよき身投げ場所を与へる事であつた。

疏水は幅十間位ではあるが、自殺の場所としては可なりよい所である。どんな人間でも、深い海の底などでフワフワして、魚などにつゝかれて居る自分の死体の事を考へて見ると、余りいゝ心持はしない。譬へ死んでも、適当な時間に見付け出されて、葬とむをして貰ひたい心がある。それには疏水は絶好な場所である。蹴上から二條を通つて鴨川の縁ぐしを伝ひ、伏見へ流れ落ちるのであるが、何処でも一丈位深さがあり、水が綺麗である。それに両岸に柳が植ゑられて、夜は蒼いガスの光が烟つて居る。先斗町あたりの絃歌の音が鴨川を渡つて聞えて来る。後には東山が静に横はつて居る。雨の降つた晩などは両岸の青や紅の灯が水に映る。自殺者の心にこの美しい夜の堀割の景色が、一種の Romance を惹き起して、死ぬのが余り恐ろしいと思はれぬやうになり、フラ／＼と飛び込

んでしまふことが多かつた。

然し、身体の重さを自分で引き受けて水面に飛び降りる刹那には、どんなに覚悟をした自殺者でも悲鳴を挙げる。之は本能的に生を慕ひ死を怖れるうめきである。然しもう何うともする事も出来ない。水烟を立て、沈んでから皆一度は浮き上る、その時には助からうとする本能の心より外何も無い。手当り次第に水を掴む、水を打つ、あへぐ、うめく、もがく。その内に弱つて意識を失うて死んで行くが、もしこの時救助者が縄でも投げ込むと大抵は夫を掴む。之を掴む時には投身する前の覚悟も助けられた後の後悔も心には浮ばない。たゞ生きようとする強き本能がある丈である。自殺者が救助を求めたり、縄を掴んだりする矛盾を笑うてはいけない。

ともかく、京都にいゝ身投げ場所が出来てから、自殺するものは大抵疏水に身を投げた。

疏水の一年の変死の数は、多い時には百名を越

したことさへある。疏水の流域の中で、最もよき死場所は、武徳殿のつい近くにある淋しい木造の橋である。インクラインの傍を走り下つた水勢は、なほ余勢を保つて岡崎公園を廻つて流れる。そして公園と分れようとする所に、この橋がある。右手には平安神宮の森に淋しくガスが輝いて居る。左手には淋しい戸を閉めた家が並んで居る。従つて人通りが余りない。それでこの橋の欄杆から飛び込む投身者が多い。岸から飛び込むよりも橋からの方が投身者の心に潜在して居る芝居気を、満足せしむるものと見える。

処が、この橋から四五間位の下流に、疏水に沿うて一軒の小屋がある。そして橋から誰かゞ身を投げると、必ず此家から極まつて背の低い老婆が飛び出して来る。橋からの投身が、十二時より前の場合は大抵変りがない。老婆は必ず長い竿を持つて居る、そしてその竿をうめき声を目当に突き出すのである。多くは手答へがある。もしない場

合には水音とうめき声を追掛けながら、幾度も幾度も突き出すのである。それでも遂に手答へなしに流れ下つてしまふ事もあるが、大抵は竿に手答へがある。夫を手練り寄せる頃には、三町ばかりの交番へ使に行く位の厚意のある男が、屹度弥次馬の中に交つて居る。冬であれば火をたくが夏は割合に手軽で、水を吐かせて身体を拭いてやると、大抵は元気を恢復し警察へ行く場合が多い。巡査が二言三言不心得を悟すと、口籠りながら、詫言を云ふのを常とした。

かうして人命を助けた場合には、一月位経つて政府から褒状に添へて一円五十銭位の賞金が下つた。老婆は之を受け取ると、先づ神棚に供へて手を二、三度たゝいた後郵便局へ預けに行く。

老婆は第四回内国博覧会が岡崎公園に開かれた時今の場所に小さい茶店を開いた。駄菓子やみかんを売るさゝやかな店であつたが、相当に実入もあつたので、博覧会の建物が段々取り払はれた後

もその儘で商売を続けた。之が第四回博覧会の唯一の記念物だと云へば云へる。老婆は死んだ夫の残した娘と、二人で暮して来た。小金がたまるに従つて、小屋が今の様な小綺麗な住居に進んで居る。

最初に橋から投身者があつた時、老婆は何うする事も出来なかつた。大声を挙げて呼んでも、滅多に来る人がなかつた。運よく人の来る時には、投身者は疏水の可なり烈しい水に捲き込まれて、行衛不明になつて居た。こんな場合には老婆は暗い水面を見つめながら、微かに念仏を唱へた。然し、かうして老婆の見聞きする自殺者は、一人や二人ではなかつた。二月に一度、多い時には一月に二度も老婆は自殺者の悲鳴を聞いた。それが地獄に居る亡者のうめきのやうで、気の弱い老婆には何うしても堪へられなかつた。到頭老婆は自分で助けて見る気になつた。余程の勇氣と工夫とで、老婆が物干の竿を使つて助けたのは、二十三にな

る男であつた。主家の金を五十円ばかり費ひ込んだ申訳なさに死なうとした、小心者であつた。巡查に不心得を悟されると、此男は改心をして働くと云つた。夫から一月ばかり経つて、彼女は府庁から呼び出されて、褒美の金を貰つたのである。その時の一円五十銭は老婆には大金であつた。彼女はよく／＼考へた末、その頃やゝ盛んになりかけた郵便貯金に預け入れた。

それから後と云ふものは、老婆は懸命に人を救つた。そして救ひ方が段々うまくなつた。水音と悲鳴とを聞くと老婆は急に身を起して裏へかけ出した。そこに立てかけてある竿を取り上げて、漁夫が銚ほこで鯉こいでも突くやうな構かまへで、水面を覗んで立つて腕うでいてゐる自殺者の前に竿を巧みに差し出した。竿が目の前に来た時に取りつかない投身者は一人もないと云つてよかつた。夫を老婆は懸命に引き上げた。通りがかりの男が手伝つたりする時には、老婆は不興であつた。自分の特権を侵害さ

れたやうな心持がしたからである。老婆は斯このやうにして、四十三の年から五十八の今迄に、五十幾つかの人命を救うて居る。だから褒賞の場合の手続なども頗る簡単になつて、一週で金が下るやうになつた。府庁の役人は「お婆さんまたやつたなあ。」と笑ひながら、金を渡した。老婆も初めのやうに感激もしないで、茶店の客から大福の代を、貰ふやうに「大きに。」と云ひながら受け取つた。世間の景気がよくて二月も、三月も、投身者のない時には、老婆は何だか物足らなかつた。娘に浴衣地をせびられた時などにも、老婆は今度一円五十銭貰うたらと云うて居た。その時は六月の末で例年ならば投身者の多い季ときであるのに、何うしたのか飛び込む人がなかつた。老婆は毎晩娘と枕を並べながら聴耳を立てゝ居た。それで十二時頃にもなつて、愈々駄目だと思ふと「今夜もあかん。」と云うて目を閉ぢる事などもあつた。

老婆は投身者を助けることを非常にいゝ事だと

思つて居る。だから、よく店の客などと話して居る時にも「私でも之で、人さんの命をよつぽど助けて居るさかえ、極樂へ行かれますわ。」と云うて居た。無論その事を誰も打ち消しはしなかつた。

然し老婆が不満に思ふことが、たゞ一つあつた。

夫は助けてやつた人達があまり老婆に礼を云はない事である。巡查の前では頭を下げて居るが、老婆に改めて礼を云ふものは殆どなかつた。まして後日改めて礼を云ひに来る者などは一人もない。

「折角命を助けてやつたのに薄情な人だなあ。」と老婆は腹の裡で思つて居た。ある夜、老婆は十八になる娘を救うた事がある。娘は正気が付いて自分が救はれた事を知ると身も世もないやうに、泣ききつた。やつと巡查にすかされて警察へ同行しようとして橋を渡らうとした時、娘は巡查の隙を見て再び水中に身を躍らせた。然し娘は不思議にもまた、老婆の差し出す竿に取りすがつて救はれた。

老婆は、再度巡查に連れられて行く娘の後姿を見ながら、「何遍飛込んでもやつぱり助かりたいものやなあ。」と云うた。

老婆は六十に近くなつても、水音と悲鳴とを聞くとき必ず竿を差し出した。そしてまたその竿に取りすがること拒んだ自殺者は一人もなかつた。

助かりたいから取りつくのだと老婆は思つて居た。助かりたいものを助けるのだから、これ程いゝことではないと老婆は思つてゐた。

今年の春になつて、老婆の十数年来の平静な生活をも、一つの危機が襲つた。夫は二十一になる娘の身の上からである。娘はやゝ下品な顔立ではあつたが、色白で愛嬌があつた。

老婆は遠縁の親類の二男が、徴兵から帰つたら、養子に貰つて貯金の三百幾円を資本として店を大きくする筈であつた。之が老婆の望みであり楽しみであつた。

処が、娘は母の望みを見事に裏切つてしまつた。

彼女は熊野通り二條下るにある熊野座と云ふ小さい劇場に、今年の二月から打ち続けて居る嵐扇太郎と云ふ旅役者とありふれた關係に陥ちて居た。扇太郎は巧みに娘を唆かし、母の貯金の通帳を持ち出させて、郵便局から金を引き出し、娘を連れたまゝ何処ともなく逃げてしまつたのである。

老婆には驚愕と絶望との外、何も残つて居なかつた。たゞ店にある五円にも足りない商品と、少しの衣類としかなかつた。それでも今迄の茶店を続けて行けば、生きて行かれない事はなかつた。

然し彼女には何の望もなかつた。

二月もの間、娘の消息を待つたが徒勞であつた。彼女にはもう生きて行く力がなくなつて居た。彼女は死を考へた。幾晩もく／＼考へた末に、身を投げようと決心した。そして堪へがたい絶望の思を逃れ、一には娘へのみせしめにしようと思つた。身投げの場所は住み馴れた家の近くの橋を選んだ。彼所から投身すれば、もう誰も邪魔する人はなか

らうと、老婆は考へたのである。

老婆はある晩、例の橋の上に立つた。自分が救つた自殺者の顔がそれからそれと頭に浮んで然も凡てが一種妙な、皮肉な笑を湛へて居るやうに思はれた。然し多くの自殺者を見て居たお蔭には、自殺をすることが家常茶飯のやうに思はれて、大した恐怖も感じなかつた。老婆はフラ／＼としたまゝ欄杆から、ずり落ちるやうに身を投げた。

彼女がふと、正気付いた時には、彼女の周囲には巡查と弥次馬とが立つて居る。之はいつも彼女が作る集団と同じであるが、たゞ彼女の取る位置が變つて居る丈である。弥次馬の中には巡查の傍に、いつもの老婆が居ないのを不思議に思ふものさへあつた。

老婆は恥しいやうな憤ろしいやうな、名状しがたき不愉快さを以て周囲を見た。所が巡查の傍の何時も自分が立つべき位置に、色の黒い四十男が

居た。老婆は、その男が自分を助けたのだと氣の附いた時、彼女は掴み付きたいほど、その男を恨んだ。いゝ心持に寝入らうとするのを、叩き起されたやうなむしやくしやした、烈しい怒が、老婆の胸の裡に充ちて居た。

男はそんな事を少しも氣付かないやうに「もう一足遅かったら、死なしてしまふ所でした。」と巡查に話して居る。それは老婆が幾度も、巡查に云うた覚えのある言葉であつた。その内には人の命を救つた自慢が、あり／＼と溢れて居た。

老婆は老いた肌が見物にあらはに、見えて居たのに氣がつくと、あわてゝ前を掻き合はせたが、胸の裡は怒と恥とで燃えて居るやうであつた。見知り越しの巡查は「助ける側のお前が自分でやつたら困るなあ。」と云うた。老婆は夫を聞き流して逃げるやうに自分の家へ駈け込んだ。巡查は後から入つて来て、老婆の不心得を悟したが、夫はもう幾十遍も聞き飽きた言葉であつた。その時ふと

氣がつくと、あけたまゝの表戸から例の四十男を初め、多くの弥次馬が物めづらしくのぞいて居た。老婆は狂氣のやうに駈けよつて烈しい勢で戸を閉めた。

老婆はそれ以来淋しく、力無く暮して居る。彼女には自殺する力さへなくなつてしまつた。娘は帰りさうにもない。泥のやうに重苦しい日が続いて行く。

老婆の家の背戸には、まだあの長い物干竿が立てかけてある。然しあの橋から飛び込む自殺者が助かつた噂はもう聞かなくなつた。

『菊池寛全集 第二卷』高松市発行より